

## 2024年度 第2回秋田市中心市街地活性化協議会開催結果

2024年12月26日（木）10時00分より、秋田商工会議所ホール80において、秋田市中心市街地活性化協議会を開催しましたので、その内容について公表します。

### （議事内容）

○場 所 秋田商工会議所 7階 ホール80

○出席者 委員：18名 オブザーバー：20名 計38名

○懇 談 テーマ：居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりに向けた取組について  
ゲスト：山形市まちづくり政策部まちづくり政策課 都市計画係長 軽部 隆征 氏

○報 告 （1）「ウォークアブルなまちづくり」調査研究事業  
（2024年度の経過報告と今後の進め方）  
（2）秋田市ホームページ「芸術文化ゾーン」のリニューアル  
（3）広小路バザールの開催結果  
（4）千秋蓮まつり2024の開催結果  
（5）冬季期間の開催イベント  
（6）その他

○情報提供 （1）東北経済産業局からの事業紹介  
（2）東北地方整備局からの事業紹介

### （発言内容）

#### 【社長の開会挨拶】

- ・ 中心市街地において、6月に千秋美術館がリニューアルオープンし、7月に千秋公園大手門の堀遊歩道が開通した。これからの中心市街地の活性化に寄与することを期待する。
- ・ イベント関連では、春の「これが秋田だ！食と芸能大祭典」を皮切りに、夏の「竿燈まつり」「千秋蓮まつり」「広小路バザール」、そして現在は「冬の大型観光キャンペーン」が展開されており、冬期間の誘客にも非常に期待を持っている。
- ・ インバウンドにおいても、クルーズ船の寄港、台湾チャーター便の運航などで、外国人の姿が目立つようになった。ただ、依然として本県の受入状況については東北六県で最下位、滞在という面では課題が残る。滞在して、ホテルに泊まり、そして秋田の夜を楽しんでもらえるような街づくりをしていかなければならないと感じている。
- ・ 当協議会では、今年度「居心地が良く、歩きやすいまちなか」を目指す「ウォークアブルなまちづくり」について調査研究を進めている。6月に東京大学の堀名誉教授を招いて、「まちづくりセミナー」を開催した。本日は、この後、山形市のウォークアブルなまちづくりに向けた取組についてご講演いただくので期待していただきたい。

- また、当協議会の「ウォーカブルなまちづくり調査研究事業」の今後の進め方や秋田市のホームページ「芸術文化ゾーン」のリニューアルについて報告するほか、東北経済産業局と東北地方整備局からそれぞれ支援策を紹介いただくので、最後までよろしくお願い申しあげます。

## 【懇 談】

### テーマ：居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりに向けた取組について

山形市まちづくり政策部まちづくり政策課 都市計画係長の軽部隆征氏はオンラインで以下のとおり説明した。

- 山形市は「歩くほど幸せになるまち」を合言葉に、公共交通の利便性向上のほか、冬でも快適に歩行できる消雪道路の整備や、歩いた分のポイントが付与される SUKSK 事業、まちなかの駐車場の適正配置、ウォーキングロード整備など、自動車を利用しない方や歩行者の目線に立った様々な施策に取り組んでいる。これらの事業と連携しながら居心地が良く歩きたくなるまちなかを目指し、公共空間の利活用や高質化に向けた社会実験に取り組んでいる。

#### ①山形市の中心市街地の概要

- 山形市の中心市街地は山形駅の北側に位置する山形城址である霞城公園の東側、かつて山形城の城下町が形成された区域を中心に広がっている。大きな戦争被害や災害被害に遭わなかったことから、明治、大正期に建てられた歴史的建造物が数多く残されている。山形駅と文翔館を繋ぐL字型の動線の歩行者数が多く動線上には山形まるごと館紅の蔵、旧山形第一小学校をリノベーションしたクリエイティブシティセンターQ1、水の町屋七日町御殿堰などのまちなか観光拠点が点在しており、距離としては駅から文翔館までのL字で約 1.8km 程度になる。また、山形市の中心市街地はQ1を中心に半径 1 km 圏内に主要な施設が集約されており、コンパクトな市街地構造となっている。

#### ②ウォーカブルのテーマ

- 「ウォーカブルなまちづくり」とは、これまで限定的な目的にしか利用できない閉じられた空間だった道路や公園などの公共空間を、人優先の居心地が良い空間に再構築することで新たな賑わいを創出しようとするものである。
- 近年はイベントを核としたウォーカブルに関する社会実験が全国各地で実施されている。しかし、イベントと抱き合わせた社会実験は、人は集まるかもしれないが、イベントのコンテンツ力に依るところが大きく、ウォーカブルの本来の目的である居心地が良い空間整備そのものの効果が見えにくくなってしまふ。また、イベントの開催には事前の準備、当日の運営から後片付けと多くの労力が必要で、プレイヤー側のイベント疲れに繋がってしまうため息の長い取り組みとして持続していくことが難しくなる。さらに、イベントそのものを目的に人が集まるため、集まった人の活動が限定的になりがちである。
- 山形市のイメージする居心地が良く歩きたくなるまちなかの賑わいのイメージは、どっと人がいるわけではないが、一つの空間にそれなりの人がいてそれぞれが思い思いの行動を取っているような日常的かつ自然な風景を指す。賑わう 1 日ではなく普段の 364 日、「ハレの日」ではなく「ケの日」をターゲットとしている。

### ③社会実験の考え方

- 山形市では、中心市街地における円滑な交通の確保に向け、駅を中心とした「駅環状道路」と、七日町大通りを中心とした「都心リング」の二つの環状道路の整備を進めている。この二つの環状道路が完成すると、自動車の流れが環状道路へ移行していくと考えられるため、環状道路の内側は、通過交通が減少し、人中心の空間整備がより進めやすくなる。
- 中心市街地で行った駐車場の実態調査では、屋外駐車場の増加によりスポンジ化が進んでいることがわかった。駐車場があれば必ず出入口があり、自転車や歩行者と入出庫車両が交錯してしまい、ウォーカブルなまちづくりの支障となる。
- このような中、環状道路の内側にある七日町大通りとすずらん通りには、通りに面した駐車場がなく、ウォーカブルなまちづくりを進めやすい通りとなっている。これらの好条件から、この2か所からウォーカブル事業をスタートし、周辺へ波及させていくこととした。
- ウォーカブルなまちづくりを進めていくにあたっては沿道の商店街やまちづくり組織などとの連携が大変重要となる。市は社会実験で効果の検証を行いながら、最終的には民間が主体となり自力で取り組みを継続してもらうことを想定している。しかし、民間との合意を得ないまま行政が社会実験を主導しすぎると、行政が勝手にしたことだと反発が広がり、民間の取り組みとして自走していく際の大きな障壁となる。また、良い結果を得られたとしても、行政に任せっきりになり民間がついてきてくれなくなってしまう懸念がある。
- このようなことを極力避けるため、社会実験のメニュー選択にあたっては連携する民間組織と協議のうえ、民間組織が自走できるメニューを選択し、将来にわたって持続可能な取組みとなるよう意識して取り組んでいる。
- 民間のプレイヤーを巻き込みながら、できることをとりあえずやってみる。社会実験なので成功することもあるれば失敗することもある。しかし、そのような取り組みの中から広がる共感の輪を大事に育てていくことでその先にある大きなビジョンへつなげていく。将来像は行政が作った計画だけではなかなか伝わらない。社会実験を行うことで、民間の皆様に分事として考え、分事として体験していただくことが非常に重要となる。社会実験は、民間のプレイヤーが「将来をイメージしてもらおう」きっかけ作りになるものであると考えている。
- 社会実験における官民の役割分担としては、行政が道路占用や什器の設置といったハード面を担い、民間にはソフト面を担っていただいた。民間側の最も大きな役割はどのように空間を使っていくかの知恵を絞ってもらうことで、行政から押し付けられるのではなく、分事として考えてもらうことが重要。
- また、令和2年度から民間主体の取組みに昇華するためのプレイヤーの発掘・育成を目的に学識者等を招いたまちづくり勉強会も開催している。

### ④これまでの社会実験の概要

- すずらん通りで、9月の週末金曜と土曜の夜、3週間「イベントなし」で歩行者天国を実施した。子ども達が道路に寝転んだり、普段の道路空間では見られない光景が見られた。最終日だけ日中からホコ天を実施。卓球、バドミントン、スケボーやサッカーができるような空間を準備したところ自然と人が集まってきた。交通規制を昼から行ったことで、夜しか開かないお店が早い時間からオープンするなど、通りに普段とは違った光景が見られた。3週目となると路面店舗が道路を積極的に使うようになった。商店街の皆様に分事としてとらえていただいた

結果であり、市として社会実験を実施した最大の効果だったと思う。

- すずらん通りで、路上駐車スペースを1日だけ小さな公園にして歩行者に開放する「パーキングデイ」に学生と一緒に取り組んだ。事前に必要な警察や道路管理者との調整も学生が行った。
- 七日町大通りで一方通行2車線を1車線に減少し、封鎖した車線に滞在空間を創出する社会実験を実施。ベンチやちょっとした休憩スペースを設置し、多くの方に活用いただいた。また、歩道への滞在什器設置のほか、自転車の「ななめ駐輪」を促すテープを貼り、駐輪の整序化を図り歩行者空間の安全確保につながることを確認した。
- 「ほっとなる広場」では広場空間の高質化に関する実験に取り組んだ。ベンチだけだった空間に、滞在快適性が向上するよう人工芝やテーブル、子供向けの低いイス・テーブルなどを追加で設置。目に見えて滞在者が増え、滞在空間としての需要が確認できた。
- 市役所敷地内の普段使われないスペースにイス・パラソルを配置。滞在空間の創出にあわせてキッチンカーの出店者を募集し、出店してもらったところ市役所の職員だけでなく周辺のオフィスからも多くの人が集まり、にぎわいを見せた。また、コワーキングスペースや子どものスペースを設けた。評判が良かったので今年度から常設、冬期間の維持管理が課題。

#### ⑤民間組織による取組みへの波及

- 民間主導での取組みへの移行を意識して社会実験に取り組んできた結果、民間組織による様々な取組みに繋がっている。商店街が独自に様々なコンテンツと連携し、道路上で様々な取組みが進められている。
- すずらん通りにおいて、社会実験をきっかけに、商店街独自での歩行者天国の実施につながったことは、社会実験の効果を肌で感じていただけた結果であり、実験で終わらずにとても嬉しく思う。自走化は始まったばかりでまだまだ課題も多いが、最終的には週末は毎週のようにホコ天になっている通りとして定着して欲しい。

#### ⑥ウォークابلとまちなか駐車場

- 中心市街地の土地の約25%が青空駐車場となっており、調査したところ過剰供給となっている。また、駐車場は歩行者と自動車の輻輳や街並みの分断等を招き、ウォークابلなまちづくりの大きな支障となることから、まちなか駐車場の適正化に取り組んでいる。
- 適正化のイメージとしては、中心市街地へは公共交通や自転車といったエコな移動手段による移動を促進しながら、自動車での来訪もある程度許容はするが、駐車場を環状道路の沿線や外側に設けることで、その内側については歩いて回遊してもらう。
- 実現するため、都市再生特別措置法に基づき立地適正化計画に駐車場配置適正化区域を設定した。区域内に新たに駐車場を設置する場合の配置基準を設け適正な配置に誘導する。駐車場配置適正化区域については、全国でも設定している都市が山形市を除き3市しかなくかなり先駆的な取組みとなる。
- また、まちなかの駐車場は主に通勤に利用されるため土日の回転率が低い傾向があるなど、駐車需要に波があることから、路外駐車場配置等基準に、営利目的での利用を認める管理規程への見直しなどの努力義務を設定し、需要の少ない時間で多目的利用を促進している。

## ⑦まとめ

- 公共空間を使った様々な社会実験を通じて多様なアクティビティが見られた。特にまちなかでは敬遠されがちなコミュニケーションが交わされるきっかけとなったことは居心地のいい場の雰囲気があったからではないかと考えている。普段の街では見ることはできなかった多様なアクティビティの発見こそがウォーカブルなまちなかづくりの最大の目的だと思う。
- 弘前大学の北原特任教授のコラムに掲載されていた言葉（『単純に「空間」を用意するのではなく、「物語」を創りだし、「場所」を再生する』）だが、ウォーカブルなまちづくりを通じて中心市街地の賑わいを再生するためには、ただ単純におしゃれな空間を用意するだけではなく、そこに関わる人に対して物語を創りだし、空間に対する関係性を生じさせることが重要であり、そうやってはじめてその場所がその人にとっての「居場所」になっていくと思う。

## <質疑応答>

NPO 法人秋田バリアフリーネットワークの菅原委員が以下のとおり発言した。

- ご説明の中で、同じ雪国として冬期間の問題をあげられていたが、今年の夏は特に猛暑で大変だった。季節ごとの課題は何かあるか。

山形市まちづくり政策部まちづくり政策課都市計画係長の軽部氏が以下のとおり発言した。

- 山形市は内陸部にあるため、夏は暑くて冬は寒い。そのため、歩きやすい環境を整備していくためには、暑熱対策は重要。街路樹の整備などが効果的だが、道路管理者側の目線になると維持管理が大変という課題があり、新規の道路整備において街路樹が整備されない事例も見られるようになった。そのため、植栽鉢の設置等で緑を確保したりするなど地道に取り組んでいる。冬場は雪が降り、路肩が除雪の堆雪帯となってしまうため、道路の利用可能なスペースが限られてしまうという課題がある。山形市では歩道に融雪装置を整備しており、特に中心市街地においては広く面的に整備されている。こうした既存のインフラを活用しつつ、冬場でも歩きやすい環境作りに取り組む必要があると考えている。

辻会長が以下のとおり発言した。

- 道路の規制にあたって、警察との交渉で苦労されたことやご助言などお聞かせいただきたい。

山形市まちづくり政策部まちづくり政策課都市計画係長の軽部氏が以下のとおり発言した。

- 道路の活用に関しては道路管理者と交通管理者（警察）との協議が必須。最初に社会実験に取り組んだ2か所の道路は国道と県道であり、市が道路管理者でなかったため、難航した部分があった。
- 道路管理者側は安全性の確保や円滑な自動車交通の確保といった、道路本来の役割に重きを置いており、ウォーカブルな政策は多少車を邪魔してでも人を優先にしたいという発想が含まれているので相容れない部分が非常に多いのは感じる。ただ、最近、ウォーカブルなまちづくりが全国的に叫ばれるようになり、道路管理者側も一定の理解をしていただける環境にはなってきているとも感じる。お互いが折り合える範囲を模索していく必要があると思う。

- 交通管理者（警察）も同様。まずは安全の確保を最優先しながら、どこまで折り合えるか協議をしながら見つけていくしかない。山形市でも、当初やりたかったことが道路管理者や交通管理者との協議の中で縮小されたという事例は当然あるので、やりたいことが全部やれるわけではないが、やれることから協議をしながら取り組み、共感を生んでいくということが大事と考えている。

秋田公立美術大学教授の小杉委員が以下のとおり発言した。

- この社会実験を始めるにあたってロードマップがあったのか。社会実験を成功させるには、失敗を織り込みつつ推進していくための中長期的なビジョンが重要ではないかと考える。また、2020年3月にウォークブル推進都市として認定されたことから、様々な取り組みがスタートしていると思うが、その認定に至る前から、まちづくりに関する気運が地域内で高まっていたのではないかと推測される。推進都市として認定されるまでについての流れなど教えていただきたい。

山形市まちづくり政策部まちづくり政策課都市計画係長の軽部氏が以下のとおり発言した。

- ウォークブル推進都市の登録を受けた背景には、ウォークブルの考え方が提唱された有識者会議の座長を務めた東北芸術工科大学の馬場先生の提案が大きなきっかけとなっている。今後車中心の都市設計から人を優先するまちづくりへの転換が必要だと考え、ウォークブル推進都市として名乗りを上げた。最初から大きな構想や計画があったわけではなく、まずはそういったまちづくりを進める意思表示をして推進都市となった。
- 今、全国各地でそういった取り組みが進められていて、壮大なビジョンを持って進めている自治体もあるが、山形市は現時点においてそういった計画はなく、まずは民間のプレイヤーも含めて社会実験に取り組み、課題を洗い出すことに重点を置いている。社会実験を経て課題が整理されつつあり、ビジョンを描くという次の段階へ進む準備が整ってきていると感じている。

秋田大学教授の篠原委員が以下のとおり発言した。

- 市役所が民間に役割を移し、みんなの街として発展させる意図は理解した。そこで、民間のプレイヤーを増やすために、市役所が陰ながら行っている具体的な支援や取り組みがあれば教えてほしい。

山形市まちづくり政策部まちづくり政策課都市計画係長の軽部氏が以下のとおり発言した。

- 民間プレイヤーの発掘や育成は、市としても最大の課題となっている。現在、商店街を中心に取り組みが進められているが、商店街の皆様は店でのお仕事メインで、ウォークブルなまちづくりは副次的な活動である。そのため、持続可能性や安定性には課題がある。例えば、商店街の役員交代などがあると取り組みが停滞するリスクもある。市としては、息の長い取り組みを担える組織や個人の育成を進める必要があると考えていて、具体的には、都市再生推進法人のような組織の設立を視野に入れているが、設立までには高いハードルがある。そのため、地道に勉強会を開催したり、ストリートファニチャー・イノベーションプロジェクトに関わった学生との連携を通じて、組織体制の構築に取り組んでいる。現時点では、柔軟な連携体制で進めているが、より確立された組織が必要だと考えている。

## 【報 告】

### (1)「ウォーカブルなまちづくり」調査研究事業（2024年度の経過報告と今後の進め方）

事務局が以下のとおり説明した。

- ・本年度、当協議会の事業活動計画に「ウォーカブルなまちづくり」に関する調査研究を位置づけている。この調査研究は、まちなかを車中心の空間から歩行者中心の空間へと転換することを目的とし、中心市街地における可能性と具体的なあり方を探るもの。

#### ①調査研究事業について

- ・他地域の先進事例などについて調査研究を進めてきた。
- ・昨年12月、東北地方整備局をゲストに迎え「まちなかウォーカブル推進事業」についての講演を開催した。この講演では、都市の力を最大限に引き出すためには、街なかに活気と賑わいを取り戻すことが重要であり、車中心の空間を人中心の空間へと改変することが新たな価値創造や地域課題の解決につながるという考えが示された。ウォーカブルなまちづくりを推進するには官民連携が不可欠であり、オープンな空間を共有し、街路灯や広場、公園、道路などの整備を進めることが必要であるとの指摘があった。また、国による社会実験や必要な計画策定への支援についても紹介された。また、本日は山形市の取組について懇談した。

#### ②まちづくりセミナーの周知協力

- ・6月には秋田商工会議所と共催で「まちづくりセミナー」を開催し、東京大学名誉教授の堀繁氏を講師に招いて講演を行った。この講演では、まちを訪れる人々が店舗を評価する基準として、店舗の外観や店先の舗装が重要であり、店舗前に花や植物、ベンチ、看板などを設置することでホスピタリティを表現する重要性が強調された。また、歩車道の幅の割合がまちの評価に大きな影響を与えるとの考えが示され、人々がくつろげる空間を提供することが求められると指摘された。
- ・10月には「東北経済連合会秋田地域懇談会」において、日本大学理工学部の泉山准教授を講師に迎え、「ウォーカブルな都市デザイン」をテーマに講演が行われた。居心地の良いまちなかを構成する要素として、歩きやすさ、街に開かれた空間、多様性、開放的な空間の重要性が挙げられ、くつろげる空間の創出が市民生活の豊かさや経済活動の活発化につながることや、小さなアクションを通じて都市を改善する「タクティカルアーバニズム」の考え方が紹介された。この考え方にに基づき、まずは小規模な取り組みを行い、その結果得られた知見を次の施策に活かす手法が有効であるとされた。

#### ③今後の進め方

- ・このような事例や考え方を踏まえ、秋田市中心市街地における「居心地の良く歩きたくなるまちなか」の実現を目指し、公共空間を活用した人々が集う空間づくりに向けた意見交換の場を設置し、グループディスカッションやワークショップ、社会実験の実施に向けた検討を行う。来年3月に開催される次回の中心市街地活性化協議会で、2025年度活動計画案を協議する予定となっている。

## <意見・質問>

秋田市都市整備部長の山下委員が以下のとおり発言した。

- ・ミルハスの建設から始まり、来年には佐竹史料館がオープンする予定。これまで、公共施設の

回遊性を高める取り組みを通じて、ウォークラブルなまちづくりを推進してきた。今後は中心市街地の他の部分にも広げる取組を皆で一緒に考えていきたい。また、庁内の関係部署も多岐にわたるため、様々な場で意識を共有していきたい。

## (2) 秋田市ホームページ「芸術文化ゾーン」のリニューアル

秋田市企画調整課長の小杉山氏が以下のとおり説明した。

- 令和4年度に設置した庁内の芸術文化ゾーンまちづくり推進プロジェクトチームによる活動について、期間は令和9年度までを予定し、市民が主体的に活動できる環境を整えることを目的としている。また、これまでのハード整備を進めてきた成果を活かし、今後はソフト事業や関係者間のネットワーク構築に重点を置いて取り組んでいる。
- 中心市街地のイベントについては、単発的な報告に留まらず、テーマを設定し、広報を活用してパッケージ化して発信する取り組みを行っている。例えば、8月には「音楽とアート」をテーマに芸術文化ゾーンでのイベントを開催し、街中を歩いて楽しむことを促した。また、公共交通の利便性を強調し、駐車場の情報や共通駐車券の案内を各ホームページで共通して発信するなど、市民の利便性を高める工夫を進めている。
- ホームページのリニューアルについては、芸術文化ゾーンを秋田の日常として感じられるよう工夫し、歴史や文化に基づいた街歩きのマップを掲載し、市民や観光客が街を楽しむための手助けを行っている。特に、予算を抑えた中で運用を進めつつ、今後はSNSなど若い世代に響く発信手法も検討していく予定である。
- また、駅前広場でのイベント開催など、公共空間の新たな使い方として、JRのさんど市、映画上映、ヨガ、学生によるプロモーション活動などがある。秋田市中心市街地の活用方法などを集約して発信し、施設管理や利用の手続きをまとめた形でホームページにリンクを貼り、活用を促している。
- 皆様の協力を得ながら、市民が自由に活動できる中心市街地を目指して取り組んでいくため、引き続き協力をお願いしたい。

## (3) 広小路バザールの開催結果

事務局が以下のとおり説明した。

- 今年度は7月と9月の2回開催し、第1回目(7/15)は来場者数が5万5000人、出店者は84店舗、協賛ブースは4社であった。
- 第2回目(9/29)は来場者数が6万2000人、出店者は85店舗、協賛ブースは4社と、いずれも過去最高の来場者数と出店者数を記録した。
- 両日とも天候に恵まれたことに加え、大手門掘遊歩道の完成により新たな回遊動線が生まれたこと、さらにはAKT「Go!Go!なかいちキッズパーク」やABSまつりなど周辺施設やイベントとの連携により回遊性を高めたことが、来場者数の増加につながったと考えられる。

## (4) 千秋蓮まつり2024の開催結果

事務局が以下のとおり説明した。

- 千秋蓮まつり2024は、交流人口の拡大とナイトタイムを含む継続的な賑わいを創出することを目的として、7月12日(金)から8月31日(土)までの51日間にわたって実施され

た。この期間中、秋田観光コンベンション協会が実施する千秋公園蓮の花のライトアップにあわせ、商工会議所として様々なイベントを周辺施設と連携して実施した。今年度は特に、大手門の堀の遊歩道や東側ポケットパークの活用、インバウンドの受入という点で新たな取り組みを実施した。

- 週末ロータスカフェはウォークブルの社会実験を先取りしたような取組になるが、東側ポケットパークに週末夜限定のオープンカフェを開設し、景観演出と周辺飲食店への誘客を促進した。日時は7月12日から8月31日までの金・土曜日の17時から21時の間で行われ、毎週テーブルや椅子を並べ、地元のキッチンカーやホテル、市内のクラフトビール醸造所に出店してもらった。最初は立ち寄る人が少なかったが、回を重ねるごとに利用者が増え、来年度も内容を拡充して実施する予定である。
- インバウンド観光の促進として、蓮まつりの期間中、秋田港に寄港したクルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」に合わせて、広小路にある美容室で浴衣の着付け体験を外国人旅行者向けに提供した。当日は非常に暑く、浴衣を着た方はいなかったが、中古の浴衣をお土産として販売したところ、7組の方々が購入される結果となった。
- さらに、8月17日・18日の土日には、大手門の堀遊歩道で「蓮の花キャンドルナイト」が実施された。遊歩道の両側に500個のLEDランタンを設置。ミルハスや文化創造館、にぎわい交流館の協力を得て、地元の小中学生や市民の方に絵や願い事をランタンの台紙に書いていただき、LEDランタンを装飾した。
- また、若年層の集客を目的とし、インフルエンサーを活用した情報発信を試験的に行った。東北各地のデートスポットを紹介するインフルエンサーのご夫婦「こちゃもちゃ」さんには、3本の1分間のInstagram動画を作成してもらった。これらの動画は、1回あたり10万回、計30万回の再生回数を記録し、その発信力の高さを感じたところ。主に20代のZ世代向けにアプローチできた。

#### (5) 冬季期間の開催イベント

##### ①SAKE と発酵市 in 秋田市

秋田市観光振興課長の高嶋氏が以下のとおり説明した。

- 今月から来年2月までの3か月間、秋田県がJR東日本の重点販売地域に指定されたことを受け、県全体で大型観光キャンペーンを展開する。そのうちの1つで、1月18日(土)と2月8日(土)に、秋田市文化創造館をメイン会場に開催する。
- 県内すべての酒蔵の地酒を集めた「地酒試飲体験」を用意しており、「秋田冬アソビ割」クーポンの活用も行う。
- そのほか、室内では県内の発酵食品を中心にした展示、屋外エリアでは商工会議所との連携により秋田かやき祭りを開催し、イベントを盛り上げてもらう。
- 単なる飲食イベントにとどまらず、周辺の観光施設や文化施設と連携したイベントであり、民族芸能伝承館では秋田万歳や秋田発酵文化に関するセミナーが開催される。また、赤レンガ郷土館では新屋ガラス工房の展示販売など行われる予定、ぜひ足を運んでいただきたい。

##### ②なかいちウィンターパーク

秋田まちづくり(株)代表取締役の畠山委員が以下のとおり説明した。

- 11月30日のイルミネーションからスタートし、12月21日にクリスマスの装飾を施した

屋台での飲食や雑貨の販売、大道芸やマジックショーなどを行うクリスマスマーケットを開催。当日は天候にも恵まれ、フィナーレに花火を打ち上げたが、たくさんの人で賑わった。

- 年明け2日と3日は、餅つきや正月遊びの体験、うどんや雑煮の振る舞いを行う予定。また、2月1日と2日は、冬の遊びを体験する「童っこの雪まつり」を開催する。氷柱花や氷の彫刻の展示のほか、制作過程も見ることができる「アイスパーク」も実施する予定である。
- さらに、2月のバレンタイン時期は、アイシングクッキーやフラワーアレンジメント、バレンタインのプレゼント用をイメージしたワークショップを開催する。また、同時期にハンドメイドやハート形のアイテムを販売する「ナカナカ市」のほか、様々なイベントも予定している。
- なお、各イベントをつなげるスタンプラリーと大抽選会も予定している。冬期間はイベント開催が難しい時期ではあるが、いつも何かやっているというイメージを持ってもらいたい。

### ③秋田県冬の大型観光キャンペーンおもてなしEVENT

東日本旅客鉄道(株)秋田支社地域連携ユニットマネージャーの三河委員代理が以下のとおり説明した。

- 12月1日から2月末までの秋田県冬の大型観光キャンペーンに合わせて、秋田駅でおもてなしイベントを4日間開催する。
- 今後の開催予定日は1月25日(土)と2月8日(土)である。こちらは秋田県誘客推進課が主催するもので、ポポロードで「秋田観光物産展」のほか観光PRを合わせて実施する。
- また、「おもてなしアクト」は秋田駅中央改札口前であきた舞妓や、1月25日限定だが、西馬音内盆踊りなども楽しめる内容になっている。さらに、秋田県産の地酒を振る舞う予定。
- 秋田駅でのイベントは観光客だけでなく、地域の皆様にもぜひ足を運んでいただくきっかけとなれればと思っている。改めて地域の魅力を発見していただく機会ともなると考えている。

### ④秋田かやき祭り、秋田市鍋マップ

事務局が以下のとおり説明した。

- 秋田かやき祭りは例年秋に開催しているが、今年は、秋田県冬の大型観光キャンペーンに合わせて、秋田市「SAKEと発酵市」(1月18日と2月8日)の会場となる秋田市文化創造館の屋外で開催する。大鍋の振る舞いやかやきの食べ比べといった内容となっている。
- 鍋マップは、観光キャンペーンの期間中、秋田市を訪れる観光客に秋田の鍋を味わっていただきたく、市内飲食店41店舗を紹介するマップを作成し、スマートフォンでウェブ版も確認が可能。秋田駅や空港などの観光案内所、各観光施設、市内のホテルなどに配布・設置した。

### 【情報提供】

- (1) 東北経済産業局からの事業紹介
- (2) 東北地方整備局からの事業紹介

閉 会